韓国における 日本ミステリー小説のポピュラリティ

—— 解放後から2010年代までの翻訳状況を中心に

Jaejin YU (兪在真 : professor, Korea University)

✉ jaejin@korea.ac.kr

(韓国) 高麗大学校文科大学日語日文学科教授。日本近現代文学専攻。主著に共編著書『異郷としての日本—東アジア留学生の見た近代』(東京: 勉誠出版, 2017)、『The problems of the absence of an inner self and of moral education in contemporary japan echoed in *convenience store human*』(FORUM FOR WORLD LITERATURE STUDIES Vol.12, No.2, Hong Kong: Hong Kong Knowledge Hub Publishing Company LTD, 2020) など。

The Popularity of Japanese Mystery Novels in South Korea

: The Translation Status from 1945 to the 2010s

This paper gives an overview of the reception of translated Japanese detective novels in South Korea from 1945 to 2021. The resulting analysis of the impact and characteristics of these translations, in the context of changes in Korean publishing and in popular culture, explains the popularity of Japanese detective novels in South Korea, and the significance of the still-current Japanese detective novel boom. Previously I have analyzed the reception of translated Japanese detective novels in South Korea from 1945 to 2009, so in this article, I will continue this analysis for the period up to 2021.

The translation and publication of Japanese detective novels in South Korea began in 1961, and the number of such texts increased little by little every year until the end of the 20th century. Then, in the 2000s, the number of translations increased sharply, and since the beginning of the 2010s, detective novels have been translated and published at nearly three times the rate as was previously the case. The popularity of Japanese detective novels in South Korea has been influenced by the prevailing circumstances in the publishing world and by political and social conditions in South Korea. In addition, detective novels with a social dimension were popular from the 1960s to the 1980s, but since 1990 when they began to make an impact on mass consumer culture, more diverse detective novels and those with lighter themes have come to the fore. Finally, the unprecedented Japanese detective novel boom Korea is experiencing is due to the appearance of star writers such as Keigo Higashino and Miyuki Miyabe. This boom seems to have cultivated a more refined sense in Korean readers of the aesthetics of detective novels, and it has also been naturally influenced by the mystery narrative form in Korean popular culture.

Keywords Popular Culture(大衆文化), Japanese Mystery novels (日本ミステリー小説), Translation (翻訳), Popularity(ポピュラリティ)

1 はじめに

1990年代アジア各国で起こった日本文学ブームや「SUSHI」、「TOFU」など日本食の流行、ジブリのアニメやサンリオのキャラクターグッズなどがローカライズされたり、キャノン化されたりして、21世紀に入ってから日本大衆文化独特の斬新さや新奇さが当地で色褪せていった感は否めない。しかし、従来のジャパニーズブームの担い手に代わって、インターネットを基盤としたニューメディアに慣れている若い世代を中心に日本のゲーム、アニメ、ライトノベル、BL物など日本の大衆小説や文化がその全貌を把握することが困難なぐらい多種多様に受容されているのも事実である。

韓国の場合に限って言えば、2010年前後よりドラマやアニメなど映像メディアの流行に勝る日本小説ブームが読書界で起こっている。一つは二十代以上の世代は知る由もなく既成メディアでもあまり取り上げていないライトノベルブームであり、もう一つは既成メディアも目を見張った日本ミステリーブームである。「ホラー・ミステリー小説の季節、夏が来た…大勢は『日本小説』¹」、「英米圏の小説より売れる日本推理小説」²、「第二の春樹? 『ミステリーの帝王』東野圭吾熱風」³、「韓国で人気、日本の推理・ホラー小説=10年で販売急増」⁴、「韓国読者を虜にした日本小説、致命的な魅力があると…」⁵、「過去10年間韓国人が一番愛した小説家は東野圭吾」⁶等々。新聞の見出しを幾つか並べただけでも2010年以降韓国で起こった日本ミステリーブームの一端が窺えられよう。

1945年の韓国解放後から2021年10月まで、韓国で翻訳出版された日本ミステリーの翻訳種数⁷をグラフで表すと次のようになる。

[表1] 1960年代から2021年までの日本ミステリー翻訳種数

¹ 윤빛나「공포・추리소설의 계절 여름이 왔다… 대세는 ‘일본 소설’」『독서신문』(2013.7.15).

² 홍도은「영미소설 보다 많이 팔린 일본 추리소설」『경향신문』(2013.7.18).

³ 조이영「제2의 하루키?... ‘미스터리소설 제왕’ 日 히가시노 열풍」『동아일보』(2014.5.29).

⁴ 「일본 추리・공포소설에 안방 내주나」『연합뉴스』(2014.7.22).

⁵ 이윤미「한국독자 사로잡는 일본소설…치명적 매력 있다는데…」『헤럴드경제』(2017.3.8).

⁶ 「지난 10년 한국인이 가장 사랑한 소설가는 ‘히가시노 게이고」『YTNNews』(2019.3.1).

⁷ 翻訳種数の調査に当たって使用した資料は、1945年から2005年までの状況を把握するために『日本文学翻訳60年現況と分析 1945-2005(일본문학번역 60년 현황과 분석 1945-2005)』(윤상인 외, 소명출판, 2008)の書誌目録を、2006年から2013年までの翻訳状況は『韓国出版年鑑(한국출판연감)』(대한출판문화협회, 2007~2015)を、2014年から2021年10月までは韓国大手出版社である教保文庫のDBを参照した。

[表1]を見ると2000年代に入って翻訳種数が上昇し、2010年代に入ってから過去10年間の約3倍近いミステリー小説が翻訳出版されたのが確認できる。日本ミステリーの流行は、2020年代に入っても僅か22カ月で128冊を超え、その勢いは一層増していると言える。2012年以後、日韓の外交摩擦や「NO JAPAN」運動など悪化一辺倒であった日韓関係を考えると、この現象は異様にも見られよう。しかし、韓国大衆は解放後も間接的に日本の大衆文化を享受してきた。1970、80年代茶の間で視聴された吹き替え版の日本TVアニメ、貸本屋で出回った海賊版の日本漫画、90年代闇ルーツで鑑賞されたジブリのアニメやJ-Pop、1998年度の日本大衆文化解禁以後はインターネットを介して流布された日本ドラマや映画等々。ただ、2000年以前の日本大衆文化が映像メディアで強みを見せていたとすれば、2000年以後のラノベやミステリー小説などは、印刷媒体の書物であるにも関わらず、空前の人気を博したという違いがある。

本稿では、解放後の1945年から2021年の今日に至るまで、韓国における日本ミステリーの翻訳受容史を概観しながらその推移を確認する。韓国語訳された日本ミステリーの種数と特徴を踏まえつつ、解放後から今日に至るまでの韓国出版市場や大衆文化の変遷と日本ミステリー受容やポピュラリティとの関連性を考察し、今日なお冷めやらぬ日本ミステリーブームが意味するところを検討する。筆者はすでに2009年度までの韓国における日本ミステリー翻訳状況を報告⁸したが、本稿では、2010年以前の翻訳状況を簡単に概観しながら、2010年以後の状況を引き続き考察する。

2 時代別翻訳状況と分析

2.1 解放後から1960年代まで：4月革命と全集ブーム

韓国における日本ミステリーの翻訳出版は1961年度から始まる。1945年の植民地解放から数えると約16年という相当の時間を要した。40年代と50年代に翻訳出版がなかった理由として一つには、解放後も読者層である大部分の知識人が日本語を読み、翻訳の必要がなかったこともあり、また、1950年の韓国戦争勃発以後、出版界及び出版状況が儘ならなかったことにも一因がある。さらに、1948年樹立された大韓民国李承満政権の強硬一辺倒の排日政策が日本語書籍の翻訳出版を封じていたからでもある。1960年4月革命によって李承満政権が崩壊されると、ようやく日本の小説が韓国に翻訳紹介された⁹。

1960年代に出版された日本ミステリーの総数は18冊で年度別には、1961年に2冊、1963年に1冊、1966年に6冊、1967年に1冊、1968年に5冊、1969年に3冊出版された。

8 유재진・나카무라 시즈요・김영란・오혜성・이주희・이진희・민권우「일본 미스터리 소설의 번역 현황과 분석: 1945-2009」(『日本研究』No.17, 고려대학교 일본연구센터, 2012年2月), pp.225-254.

9 崔元植は、『四月革命と韓国文学』の冒頭で金大中政府の出現が日本大衆文化の解禁を呼び起こし、李承満独裁の崩壊が日本文学の解禁を催した、と指摘している。(최원식・임규찬『4월 혁명과 한국문학』창작과 비평사, 2002, pp.10-11)。

1961年に出版された日本ミステリーは、仁木悦子の『猫は知っていた』(ホ・ムニョン訳、ジンムン出版社)と松本清張の『ゼロの焦点』(イ・ギュシク訳、自由社)だ。そして、1965年朴正熙政権下で日韓国交正常化条約が交わされた以後、日本ミステリーの翻訳出版数は増えだした。

1960年代に出版された18冊のうち、7冊が全集や選集の類であった。全集や選集のような企画出版は60年代の韓国出版界で流行り、日本文学の出版もその流れに沿ったものであった。企画出版の対象は主に同時代の純文学作家の作品に偏り、新丘文化社の『日本戦後問題作品集』(1960)と青雲社の『日本文学全集』(1960)に始まり、その後多くの全集類が重複出版された。このような過程でミステリーも日本文学全集類に収められて紹介され出したのである。例えば、1966年に刊行された希望出版社の『日本代表作家百人集』には江戸川乱歩、松本清張、土屋隆夫、佐野洋、黒岩重吾の作品が収められている。

この時期の韓国出版界の悪い慣例として見過ごせないのが、無文別な重複出版の問題である。例えば、希望出版社の『日本代表作家百人集』(1966)がその後、新太陽社より体制や本文は全く同じだがタイトルだけ『日本短編文学全集』(1969)と改められて出版されている。このような重複出版は70、80年代でも見られるが、1987年10月韓国が国際著作権協約に加入した以後は徐々に姿を消していった。

2.2 1970年代：維新体制と推理小説ブーム

1970年代韓国語訳された日本ミステリーの総数は、75冊で60年代に比べて目を見張るほどの増加である。75冊のうち、全集類は26冊でそのうちの3冊が『世界推理文学全集』の類に収められている。そして松本清張の作品集が20冊も刊行されて1960年代の傾向と大きな違いを見せた。また、殆どの作品が文庫や単行本の形で刊行されているのもこの時期の特徴と言える。年度別に翻訳冊数を見ると、1972年に3冊、1973年に3冊、1974年に11冊、1975年に6冊、1976年に19冊、1977年に9冊、1978年に17冊、1979年に7冊が刊行された。70年代に翻訳されたミステリー作家のベスト5を挙げると、松本清張が38冊、森村誠一が14冊、江戸川乱歩が4冊、小松左京が3冊、戸川昌子が2冊刊行された。70年代に出版された日本ミステリー75冊のうち半分以上が松本清張の小説で、その人気の程が窺えられる。

1972年10月17日、非常戒厳令の施しから始まった朴正熙政権の維新体制は、思想と表現の自由を極限に抑圧した。金昌南は1970年代の維新体制を「享楽主義」と「厳粛主義の矛盾」と表現し、大衆文化は「商業主義」と「享楽主義」を標榜していたが、維新体制は寧ろ「厳粛主義」に近かった¹⁰と指摘している。しかしながら、大衆文化の商業性が朴政権下の経済政策と相まって生じたことを踏まえると、「享楽主義と厳粛主義」は納得のいく現象でもあった。朴政権の経済政策は1970年代に入って既存の重工業体制から脱しようと

¹⁰ 김창남 「유신문화의 이중성과 저항문화」(『역사비평』No.32, 1995), pp.127-128.

して、重化学工業の育成に励んだ。韓国も徐々に2次、3次産業の比重が徐々に増えだし、人口の大都市集中現象もみられ出したのである。産業の高度化に伴いラジオ、TVなどの普及も徐々に拡散され、1970年代は、韓国社会において「大衆文化の生産・流通・消費の構造的基盤が完成」¹¹された時代と言える。

大衆文化の消費構造が整えられたことによって、読書行為においても「軽装化」¹²が進み、世界的な文豪や名作を集めた全集類から文庫本、単行本出版へと出版形態がシフトし出したのである。また、70年代に入ってから出版市場も成長し、1976年度には前年度に比べ「種数では158%、部数では303%伸長する記録を立て」¹³ている。このような大衆文化のインフラ構築は、出版界にも影響を及ぼし、出版社は大衆の嗜好にあったシリーズ物を企画するようになった。多くの出版社が〈ミステリー名作シリーズ〉(三重堂)、〈世界推理文学全集〉(河西出版社)、〈河西推理新書〉(河西出版社)、〈風林名作推理小説シリーズ〉(風林出版社)、〈智罈林推理文庫〉(智罈林文庫社)など推理小説のシリーズを刊行し、これらのシリーズ物を通して韓国読者は西洋や日本のミステリーを読み出したのである。

2.3 1980年代：大型書店の出現と社会告発小説の人気

1980年代に入って韓国の出版市場は70年代と比較して飛躍的に成長した。1980年の総出版種数は20万を超え、83年には種数では3万種を、部数では1億部を突破した。日本ミステリーの翻訳も70年代に比べ約2倍以上が増加して80年代には155冊が翻訳出版された。年度別翻訳冊数を見ると、80年に4冊、81年に23冊、82年に18冊、83年に13冊、84年に25冊、85年に22冊、86年に8冊、87年に14冊、88年に15冊、89年に13冊出版された。80年代の日本ミステリー作家の上位5を挙げると、第一位の松本清張が45冊、第二位の森村誠一が27冊、第三位の黒岩重吾が24冊、共同4位の西村寿行と笹沢沙穂がそれぞれ8冊ずつ翻訳出版された。松本清張と森村誠一は80年代に入っても引き続き人気を博した。

80年代における松本清張や森村誠一の翻訳出版の特徴は、70年代から流行し出した企業小説の企画シリーズ物の中に松本清張と森村誠一らの作品が多数収録されたことである。70年代の企画シリーズ物の流行は、80年代に入って翻訳文学の企画シリーズという形で継続された。このような企画シリーズは85年を境に徐々に減少されたが、その理由に関して金秉喆は、「あまりの多くの全集と文庫の類が翻訳出版されて供給の数が需要を満たしたのみならず、超えていたからである」¹⁴と指摘している。

¹¹ 上掲書, p.123.

¹² 대한출판문화협회『대한출판문화협회 40년사』(대한출판문화협회, 1987), p.179.

¹³ 上掲書, p.183.

¹⁴ 김병철『한국현대번역문학사 연구 하』(을유문화사, 1998), p.763.

1980年代、韓国の出版市場の活性化は出版種数と部数の増加とともに書店の発展を促した。70年代と80年代の一番大きな違いは大型書店の出現である。鐘路書籍¹⁵と教保文庫¹⁶の登場がそうであり、これら大型書店が用いた「完全開架式の図書陳列」は、図書陳列の空間不足によって新刊書籍が陳列されることもなく出版社に返品されたそれまでの出版界の問題をある程度解消することができた。また、大型書店の出現によって、それまで中小書店の本棚にあまり陳列されなかったミステリーを含めた各種多様な大衆小説を顧客が直接手にとって買うことができたのである。このような大型書店は徐々に増えて1988年には100坪以上の中・大型書店が全国で30か所も設けられた。

1980年代末ごろからほとんどの家庭にカラーテレビが普及されるなど韓国人の文化生活の水準は、以前にも増して大きく改善されてはいたが、80年代は相変わらず政治的にも社会的にも混乱な時代であった。1980年5月、光州民主化運動を武力鎮圧した後、1981年3月に誕生した全斗煥大統領の第5共和国は、政権の基盤を固めるために、労働運動を弾圧する「第三者介入禁止法」や学生運動を弾圧する「社会保安法」、「社会治安法」など新しい法と制度を設けて社会統制を強めた。軍部独裁政権に対抗するための民衆運動が高揚し、多様な労働運動、学生運動、在野運動が展開された時代であり、このような政治・社会状況を取り上げた社会告発小説が多く読まれた。社会告発小説は、当時の統制的な政権に対する批判意識を持たせるために書かれ、読者としても小説での告発を通して抑圧された欲望を解消することができたのである。80年代韓国語訳された日本ミステリーの上位を占めていた松本清張、森村誠一、黒岩重吾など所謂、社会派推理小説の作家や作品も社会の暗部や陰謀を「告発」する小説という文脈で読まれ、親しまれていたと思われる。例えば、これら社会派推理小説の「長編告発小説」¹⁷という角書きや「私たちの現実をそのまま移しておいたような錯覚に陥る」、「政治が腐敗した時、治者の刃はどちらに向くのかを明確に見せてくれる」¹⁸などの宣伝文句から当時の韓国読者が日本の社会派推理小説に何を求めていたのかが窺える。

2.4 1990年代：大衆消費社会と赤川次郎

1990年代日本ミステリーの翻訳出版総数は181冊で、その内訳は90年に2冊、91年に

¹⁵ 1907年にイエス教書会という名でソウルの鐘路2街に開業した韓国で一番長い歴史を誇った鐘路書籍は、1979年10月1日にそれまでの300坪の売店面積を700坪に拡張させた。この書店は1985年10月にさらに1080坪に拡張させ、韓国最大の書店として情報と知識流通の中心地としての役割を担った。(대 한출판문화협회, 前掲書, p.186).

¹⁶ 1981年6月、光化門十字路に位置している教保ビルディング地下1階に開店した教保文庫は、当時売店面積900坪の現代的な書店として完全開架式の図書陳列と顧客のための荷物預かり所、休息用の椅子、スナックコーナー、文具店等が備えられて当時としては新しい概念の書店空間を作り上げ、話題のホットスポットであった。(이중한 외『우리 출판 100년』현암사, 2001, p.191 参照).

¹⁷ 구로이와 주교 『먹느냐, 먹히느냐』(진은기訳, 금문당, 1983)表紙の見出し。

¹⁸ 마쓰모토 세이초 『아무도 대권을 잡지 못했다』(全3巻, 김남환訳, 청맥, 1987).

17冊、92年に17冊、93年に21冊、94年に25冊、95年に30冊、96年に10冊、97年に20冊、98年に11冊、99年に28冊出版された。90年から95年にかけて順調に伸びていた出版種数が96年には出版界を襲った不況によって一時減少している¹⁹。出版界を襲った不況の一因には貸本屋の出現を挙げられる。韓国の出版界は1997年廉価のペーパーバックを出版して本代値下げによる一時的な売り上げ増加を見せた²⁰が、IMF事態によって出版量は激減した。このような不況にも関わらず96年から98年の三年間を除いて日本ミステリーの翻訳出版は断続的に増加し、90年代の総数を見てもやはり80年代に比べて増しているのが分かる。

90年代の日本ミステリー受容を考える際、注目しなければならないのが90年代韓国で起こった日本小説ブームである。1989年『喪失の時代』(ユ・ユジョン訳、文学思想社)というタイトルで翻訳された村上春樹の『ノルウェイの森』(1987)は60年代に大ブームを起こした三浦綾子の『氷点』(李時哲訳、韓国政経社、1965年、他に孫玫訳、春秋閣、1965年版もある)以後二度目の日本小説ブームを巻き起こした。村上春樹は韓国で作品性と大衆性という両面において認められ、以後韓国文壇では日本文学の積極的な評価と翻訳が行われた。また、1995年一人当たりGNI(国民所得)が1万ドルを超え、韓国社会は大衆消費時代に突入した。90年代は、それまで政治や社会へ向けられていた関心が個人や個人の欲望追及へとシフトした時代であった。このような大衆消費時代のなかで起きた日本小説ブームは自然と日本ミステリーの大々的な受容へと引き継がれた。

90年代に翻訳された日本のミステリー作家の上位5を挙げると、一位が赤川次郎で19冊、二位が森村誠一で16冊、三位が夢村獏で15冊、四位が松本清張で8冊、五位が笹沢沙穂で7冊出版された。80年代まで一位を占めていた松本清張が四位に下り、全く毛色の違う赤川次郎や夢村獏が上位に登場したのである。このような状況を踏まえながら90年代の特徴を挙げると以下ようになる。

第一に大衆小説・文化の新しい消費者層として、購買力を持ちだした「新世代」「X世代」と呼ばれる若い世代が浮上してきたことである。この新しい世代の若者たちは映像メディアに囲まれて育ち、自分の趣味のためにお金を使うことに躊躇せず、消費に対して積極的な態度を持っていたので、消費産業や文化産業の主要なターゲットになった。

第二に貸本屋の出現と増加である。1993年に登場した貸本屋は94年には6千、95年には7千、96年には8千7百カ所まで増加した²¹。貸本屋利用者の75.4%が中高生で彼らが主に貸し出したのは、学校の図書館が所蔵しないベストセラーやミステリー・SF小説が多かった²²。この貸本屋の出現によりミステリー読者層の底辺が広がったのは言うまでも

19 1995年は放送、映像文化の発達によって読書人口が減少し、出版業界は打撃を受けた。出版量を減らしたり、経営規模を縮小したりと打開策を練ったが経営難に陥った出版社が相次いだ。(김이금『1990년대 번역소설 베스트셀러에 관한 연구』慶熙大学校言論情報大学院修士論文, 1998, p.37).

20 この不況を克服するために出版界は相対的に生産単価や供給単価の低いソフトカバーの書籍を出版する企画を大々的に行った。(이인우「값싼 '페이퍼 백' 출판, 출판계 불황 탈출을 모색」『한겨레신문』1996.3.6).

21 김이금, 前掲書, p.63.

ない。

第三に日本のSFやホラー小説が多く翻訳された点である。夢村獏のみならず鈴木光司の『リング』(全3巻、ユン・ドックジュ訳、シーエンドシーメディア、1998~1999)も大反響を呼び、1999年日韓合作で映画「リング」が製作され、韓国では観客17万人が観覧し、空前のホラーブームを起こした²³。

第四にアンソロジー形式の短編小説集の企画出版が目立つ。90年代韓国出版業界に起きた不況を乗り越えるために、多種多様な作家の作品を集めてとにかく売られる本を出そうという、出版社側の窮余の策としてアンソロジー企画が試みられた。この時、『日本サスペンス傑作選』(高麗メディア、1993)、『Jミステリー傑作選』(全3巻、胎動出版社、1999)、『ベスト・ミステリー2000』(全2巻、胎動出版社、1999)などの短編ミステリーのアンソロジーが多数出版された。

第五に赤川次郎の登場が示唆するように80年代までの社会派推理小説に代わって、軽くユーモラスな大衆受けのするミステリーへと韓国読者の嗜好が変わった。80年代日本のバブル経済を背景に人気を博した赤川次郎のミステリーが大衆消費社会に入りつつあった90年代の韓国読者の嗜好と通底したのは想像に難くない。

2.5 2000年代：スター作家の登場

2000年代に翻訳出版された日本ミステリーの総数は363冊で1990年代の倍以上に増加した。年度別出版数を見ると、2000年に16冊、2001年に8冊、2002年に4冊、2005年に32冊、2006年に17冊、2008年に122冊、2009年に85冊出版された。1998年、金大中政府の日本大衆文化開放以後、日本ミステリーの翻訳出版が増すだろうという時期に反して2000年代中盤までの翻訳出版冊数は90年代とあまり変わらず、2007年以後になって急増した。2000年代中盤まで変動が少なかったのは、多分IMF事態の後遺症のように景気が著しく不況に陥ったからであろう。2006年には「ワーキングプア」、2007年には「88万ウォン世代」²⁴という新造語が登場した次第である。しかし、このような流れは東野圭吾を筆頭とするスター級作家の登場によって急変した。

2000年代翻訳出版された作家の上位5を見ると、一位が東野圭吾で34冊、二位が宮部みゆきで29冊、三位が星新一で27冊、四位が恩田陸で14冊、五位が西尾維新で10冊出版された。1999年『秘密』(全2巻、リ・ソンヒ訳、掃海)で初めて韓国語訳された東野圭吾の小説は、翌年の『白夜行』(ジョン・テウォン訳、胎動出版社)と2006年の『容疑者Xの献身』(ヤン・オッグァン訳、現代文学)を相次いで成功させながら韓国で日本ミステリー作家と

22 이종현『우리나라 도서대여점에 관한 연구』(東国大学校情報産業大学院修士論文, 1996), p.61.

23 김주영「한일합작 공포영화 <링> 전국 17만 관객 동원」(『매일경제』1999.6.18).

24 就職難と非正規雇用で喘ぐ20代の若者達を指す言葉。非正規雇用者の月平均給与が88万ウォンだったところから来た名称である。

としての立地を固めた。また、2000年代の特徴としてミステリー小説と映画やドラマなどメディアミックスのシナジー効果が見られたことである。特に東野圭吾の上記の三作品は全て映画化され韓国でも上映された。なかでも『容疑者Xの献身』はそれまでミステリーファンでなかった観客も日本ミステリーを求めるようになった顕著なケース²⁵であり、2000年代日本ミステリーブームを巻き起こした影役者でもある。

東野圭吾や宮部みゆきなど日本のスター級ミステリー作家の登場は、出版社間の無文別な出版競争を引き起こすまでもなった。出版契約を先取りするためにスター作家の先占に励み、内容の検証がおろそかになっていった傾向も見られ、また5、6年前に比べ先印税が3、4倍にまで膨れ上がった挙句、出版量が多少減ってしまった現象も見せている²⁶。しかし、このようなスター作家の登場によって韓国で日本ミステリーのファンダムを構築し、読者層を広めていったのは確かである。日本ミステリーへの関心は同時代のミステリーから「古典」とも言える前時代のミステリー作家へと遡り、江戸川乱歩の選集のみならず、小酒井不木、谷崎潤一郎、坂口安吾の探偵小説や横溝正史などの推理小説の翻訳出版へと引き継がれた。

2.6 2010年代：同時出版と韓国ミステリージャンルの活性化

2010年から2021年にかけて韓国語訳された日本ミステリーは、1,032冊で2000年代と比較しても約3倍近く増加した。日本ミステリーが韓国大衆文学の一軸を成している事を否定できない程の出版種数である。年度別出版冊数を見てみると、2010年に122冊、2011年に98冊、2012年に115冊、2013年に76冊、2014年に94冊、2015年に57冊、2016年に63冊、2017年に90冊、2018年に84冊、2019年に105冊、2020年に73冊、そして2021年の10カ月間に55冊出版された。

2010年代の特徴としてまず挙げられるのは、2000年代に引き続きスター級作家の東野圭吾や宮部みゆき等の小説はもちろんのこと、さらに多種多様なミステリー作家の小説が翻訳紹介された点である。大御所の日本推理作家協会の受賞作はもちろん、『このミステリーがすごい!』で大賞を受賞した作品や本屋大賞の受賞作やノミネート作も多数翻訳された。この時期約300人を超えるミステリー作家の小説が翻訳されたのである。作家のランキングベスト5を挙げると、一位が東野圭吾で96冊、二位が宮部みゆきで54冊、三位が中山七里で32冊、四位が赤川次郎で29冊、五位が歌野晶午で22冊出版された。ちなみに1990年代一番多く韓国語訳された赤川次郎のミステリー小説は、2013年4月『幽霊候補生』（ハン・ソンレ訳、シーエルブックス）を最後にそれ以後は出版されていない。

²⁵ 2009年には『愛を読む人(The Reader)』、『スラムドッグ\$ミリオネア(slumdog millionaire)』、『容疑者Xの献身』などの映画の原作が、教保文庫小説部門のベストセラー上位に入っていた。

²⁶ 한국추리소설가협회「2008년 추리소설 결산」(『월간 미스터리』No.22, 화남출판사), p.22.

2010年代韓国における日本ミステリーブームを牽引しているのは何といたっても東野圭吾である。2010年代の特異は出版現象としては、東野圭吾小説の同時期出版を挙げられる。2020年3月、東野圭吾は作家生活35周年を祝って書下ろし長編小説『クスノキの番人』の同時期出版を行っている。出版言語は、日本語版・中国語簡体字版・中国語繁体字版・韓国語版があり、中国・韓国・台湾・香港エリア・シンガポール・マレーシアなどアジア圏で販売された。また同年刊行された『ブラック・ショーマンと名もなき町の殺人』も韓国を含むアジア7カ国・地域で同時出版されている。日本語と韓国語版が2020年11月30日に同時出版され、中国語繁体字版、中国語簡体字版、タイ語版、ベトナム語版、インドネシア語版が2021年2月から一か月置きにほぼ同時期に出版された。このような同時出版が可能なのは韓国を含めてアジア圏での東野圭吾の人気の確実で「日本」を超えた固定の読者層を確保していることの証である。書き手にこのトランスナショナルな状況がどれ程影響しているのかは別として、読み手としては、東野圭吾が「日本語」で創作する、韓国読者としては外国の作家であるという事実はもはや何の意味をなさなくなったのである。

韓国における日本ミステリーのポピュラリティーは、ミステリーを楽しむ読者層と共に発展してきた。韓国でミステリー愛読者によるコミュニティは1999年に開設された、PC通信ナウスの推理文学同好会の運営者が同年開設したハウミステリ(howmystery.com)から始まる。そして、ミステリー小説の中でも特に「日本ミステリー」を対象を絞った同好コミュニティ、〈日本ミステリーを楽しむ〉という同好カフェが2004年3月にネイバーカフェとして開設され、2021年現在1.3万人を超える会員を設けている。また、韓国のインターネット文化のサブカルチャーを代表する韓国最大規模のコミュニティサイトであるDcinsideに2016年10月12日に〈推理小説〉マイナーギャラリー(使用者が直接開設できるギャラリー)が開設されている。このようなミステリー・ファンダム形成と拡張に日本ミステリーの翻訳受容の影響が大きかったことは言うまでもない。

ミステリー読者層の拡大増加は、ミステリー出版市場の増大を意味し、自然と韓国人作家に寄る創作へと繋がる。つまり、日本ミステリーの翻訳出版が増加した2000年以後、韓国人作家によるミステリージャンルの出版数も90年代に比べ確実に増えだしたのである。下記の表は教保文庫の韓国小説中「ミステリー・ジャンル小説」にカテゴライズされた小説の種数と日本ミステリー翻訳出版種数を年代別に比較したものである。

[表2] 韓国ミステリーの出版種数と日本ミステリーの翻訳種数の比較

上の表でグラフが右肩上がりに伸びているのは、出版市場の拡大や大衆文化の流行など他の要因も挙げられるだろうが、それでも韓国における日本ミステリーの翻訳出版の変動と連動しているのが見受けられる。例えば、2018年、CJで催したE&Mカオページ第二回推理・ミステリー・スリラー小説公募展で金賞を受賞し、ミステリー作家としての立地を固めたジョ・ヨンジュ作家は『チャンネルYES』誌とのインタビューで以下のよう

に語っている。

それで、全て[小説の創作：引用者注]を諦めようとしたんですが、偶然南山図書館で宮部みゆきの『理由』を見たんです。〈今月の推薦図書〉として選定された本だったのに一カ月間誰も貸し出してなかったんですね。それで、気になって借りてみたんです。(中略)夜をふかしながら読みました。そして、「もしこれが推理小説というものなら、私も推理小説を書きたい」と決心したんです。(中略)まず宮部みゆきの小説を全部読み、それから宮部みゆきが推薦した本も全部読んだんです²⁷。(翻訳は引用者に抛る。)

上の引用文で現在韓国の有望な若手ミステリー作家であるジョ・ヨンジュはミステリー作家となった切っ掛けやその模範として宮部みゆきを挙げている。純文学作家であった彼女が日本のミステリーを読み、影響を受けながらミステリー創作に移行した状況を語っている。また、2021年10月に刊行された韓国人作家ケイシーのデビュー作であり話題作²⁸でもあった『四回のノック』(ケイシー作、インフルエンサー)の帯の宣伝文

²⁷ 임나리「조영주 쓸데없는 덕질이란 없다」『채널예스』(2019.8.16).

²⁸ 作家が直接本を製作してオンライン書店で販売したところ、或る映画製作者の目に留まり、映画化が決定してそれが話題になって紙印刷出版された。

句は「ケイシーは宮部みゆきに似ている。」という一文である。つまり、「宮部みゆき」は韓国のミステリー読者にとっては、他の説明を必要としない「ミステリーの上手な作家」という名詞で通っているのである。

3 おわりに

以上、解放後から今日に至るまで韓国における日本ミステリーの受容史を時代別に概観した。2000年代以後、韓国で巻き起こった日本ミステリーブームが60年代から始まり以後継続された日本ミステリー受容の延長線上にあった事を確認した。

1960年4月革命によって始まった日本文学ブームの中で日本ミステリーは翻訳され始め、その後70年代のミステリー企画物の出版を経て80年代の社会告発小説の延長線上で松本清張をはじめ社会派推理小説の人気へと引き継がれた。90年代の大衆消費文化が定着した一方、貸本屋の増加によってそれまでの社会派小説とは毛色の違うより大衆的な小説が流行り、その過程で赤川次郎の小説が人気を博すようになった。2000年代に入ってからにはもっと多様な日本ミステリーが翻訳される一方で、宮部みゆきや東野圭吾などのスター級作家の登場と彼らの小説が映画、ドラマなど他のメディアを通しても享受されるようになった。このような日本ミステリーブームは2010年代に入ってから拍車をかけて、韓国大衆小説の主要な一軸を成しているのみならず、韓国ミステリーの活性化の滋養分にもなっているのが現状であろう。

韓国における日本ミステリーは、韓国の社会や政治の情勢、文化産業の発展状況に影響されながら受容されてきた。近代以後ミステリージャンルは、韓国の大衆小説において決してメジャーなジャンルとは言えなかった。韓国人作家に寄るミステリージャンルの空白を英米ミステリーを含めて日本ミステリーの翻訳小説が埋めてきたことは否めない。翻訳依存の現象に杞憂の声がなかったわけではないが、2000年度以後韓国で刊行された大衆小説や製作されたドラマ、映画などにミステリー叙事を駆使したコンテンツが多くを占めている現状と韓国における日本ミステリーのポピュラリティは無縁ではないと思われる。

参考文献(Bibliography)

著書

- 김병철(1998)『한국현대번역문학사 연구 하』, 서울: 을유문화사. Kim, B.(1998) *Hanguk Hyeondae Beonnyeok Munhaksa Yuengu Ha*, Seoul: Eulyumunhwasa.
- 김이금(1998)『1990년대 번역소설 베스트셀러에 관한 연구』, 서울:慶熙大学校言論情報大学院. Kim I.(1998)

- 1990Nyeondae Beonnyeoksoseol Beseuteuselleoleoe goanhan Yeongu, Seoul : Gyeonghidaehaggyeoneojeongbodaehagyeon.
- 대한출판문화협회(1987)『대한출판문화협회 40년사』, 서울 : 대한출판문화협회. Daehanchulpanmunhahyeobhoi (1987) *Daehanchulpanmunhahyeobhoi 40Nyeonsa*, Seoul : Daehanchulpanmunhahyeobhoi.
- 대한출판문화협회 (2007~2015)『한국출판연감』, 서울 : 대한출판문화협회. Daehanchulpanmunhahyeobhoi (2007~2015) *Hangugchulpanyeongam*, Seoul : Daehanchulpanmunhahyeobhoi.
- 윤상인·김근성·강우원·이한정(2008)『일본문학번역 60년 현황과 분석 1945-2005』, 서울 : 소명출판. Yun S.·Kim G.·Gangu U.·Lee H.(2008) *Ilbonmunhagbyeonyeog 60yeon hyeongoanggoa bunseog 1945-2005*, Seoul : Somyeongchulpan.
- 이종현(1996)『우리나라 도서관여점에 관한 연구』, 서울 : 東国大学校情報産業大学院. Lee J.(1996) *Ullinala Doseodaeyojeome goanhan Yeongu*, Seoul : Donggugdaehaggyeongbosaneobdaehagyeon.
- 이중한·이두영·양문길·양평(2001)『우리 출판 100년』, 서울 : 현암사. Lee J.·Lee D.·Yang M.·Yang P.(2001) *Ulichulpan 100nyeon*, Seoul : Hyeonamsa.
- 최원식·임규찬(2002)『4월 혁명과 한국문학』, 서울 : 창작과 비평사. Choi U.·Im G.(2002) *4ueol Hyeogmeonggoa Hangugmunhag*, Seoul : Changjaggoa Bipyeongsa.

論文・雑誌

- 김창남(1995)『유신문화의 이중성과 저항문화』『역사비평』Vol.32, pp.127-128. Kim C.(1995) 'Yusinmunhwaui Ijungseonggoa Jeohangmunha. *Yeogsabipyong* Vol.32, pp.127-128.
- 유재진·나카무라 시즈요·김영란·오혜성·이주희·이진희·민권우(2012)『일본 미스터리 소설의 번역 현황과 분석 : 1945-2009』『日本研究』Vol.17, pp.225-254. Yu J.·Nakamura S.·Kim Y.·O h.·Lee J.·Lee J.·Min G.(2012) *Ilbon Miseuteoli Seoseoleui Hyeonhoanggoa bunseog : 1945-2009*, *Ilbonyeongu* Vol.17, pp.225-254.
- 한국추리소설가협회 (2008)『2008년 추리소설 결산』『월간 미스터리』Vol.22, pp.2-22. Hangugchulisosealgahyeobhoi(2008). 2008nyeon Chulisoseol Gyeolsan, *Ueolgan Miseuteoli* Vol. 22, pp.2-22.

新聞

- 김주영「한일합작 공포영화 '링' 전국 17만 관객 동원」『매일경제』1999.6.1. Kim J., Hanilhabjag Gongpoyeonghwa 'ling' Jeongug 17man Goangaeg Dongueong, *Maeilgyeongje*, 1999.6.1.
- 윤빛나「공포·추리소설의 계절 여름이 왔다… 대세는 '일본 소설」『독서신문』2013.7.15. Yun B., Gongpo·Chulisoseoleui Gyejeol Yeoleumi Oadda…Daeseneun 'Ilbon Sosed', *Dogseosinmun*, 2013.7.15.
- 이윤미「한국독자 사로잡는 일본소설…치명적 매력 있다는데…」『헤럴드경제』2017.3.8. Lee Y., Hangugdogja salojabneun ilbonsoseol…Chimyongjeog Maelyeog Iddaneunde…, *Heoldeugyeongje*, 2017.3.8.
- 이인우「값싼 '페이퍼 백'출판, 출판계 불황 탈출을 모색」『한겨레신문』1996.3.6. Lee I., gabssan 'Peipeo Baeg' Chulpan, Chulpangyeo bulhoang Talchuleul Mosaeg, *Hangyeolesinmun*, 1996.3.6.
- 임나리「조영주 '쓸데없는 덕질'이란 없다」『채널예스』2019.8.16. Lim N., Choyeongju 'Sseuldeeeobsneun Deogjillan Eobsada', *Chaeneolyeoseu*, 2019.8.16.
- 조이영「제2의 하루키? … '미스터리소설 제왕' 日 히가시노 열풍」『동아일보』2014.5.29. Cho I., Je2eui Haluki? … 'Miseuteolisoseol Jeoang' Il Higasino Yeolpung, *Dongailbo*, 2014.5.29.
- 홍도는「영미소설 보다 많이 팔린 일본 추리소설」『경향신문』2013.7.18. Hong D., yeongmisoseol Boda Manhi Pallin Ilbon Chulisoseol, *Gyeonghyangsinmun*, 2013.7.18.
- 「일본 추리·공포소설에 안방 내주나」『연합뉴스』2014.7.22. Ilbon Chuli·Gongpososeole Anbang Naejuna, *Yeonhabnyuseu*, 2014.7.22.
- 「지난 10년 한국인이 가장 사랑한 소설가는 '히가시노 게이고」『YTNNews』2019.3.1. Jinan 10nyeun Hangugini Gajang Salanghan Soseolganeun 'Higasino Geigo', *YTNNews*, 2019.3.1.